

\*\*\*\*\*

# 天地

ネットワーク テーブル 444号

発行：天地シニアネットワーク：2017・3・15

\*\*\*\*\*

T E N T I ・ T O D A Y			1
会員の広場＜天のわざ・よろしく＞＜卒業式の歌（2）「蛍の光」＞			2
連載作品			3
随 想	天のわざ、地のほまれ―地球を測れ、宇宙をはかれ― 21. 役に立つ微分法と積分法―その1	伊那 闊歩	3
旅行記	そうだ京へ行こう・古刹の花物語（18） ＜北山の古刹・岩倉・実相院門跡＞	大竹 漢洲	7
解 説	般若心経読本（5）	藤田 克明	10
講演会	「奈良興福寺文化講座」「新三木会」		13
事務局			14

\*\*\*\*\*

## T E N T I T O D A Y

\*\*\*\*\*

海外での安倍首相のスピーチは、説得力があって、頼もしく見えますが、国会での答弁は、別人のようです。国会での答弁は、国民への説明にもなっているはずですが。早口でまくしたて、相手を攻撃するような答弁では、しられません。外交も大事ですが、国内の手抜きが続くと、影響がでます。

女性閣僚の国会での答弁、＜知らぬ存ぜぬ＞と言いながら証拠が出てくるとく勘違いでした。ごめんなさい＞と謝り＜今後は、誠心誠意をもって職務を全うしたい＞と見苦しい。最近、同じような場面が多いように見えます。政治家だから嘘をついても良い、ではなくて、政治家だからこそ、国民には正直であって欲しいものです。それが日本の伝統であり、現在の常識です。

\*\*\*\*\*

大相撲が始まり、選抜高校野球も始まりますが、日本のスポーツは、礼で始まり、礼で終わります。政治家は、国民に「礼」を要求しますが、ご自分の「礼」を失する行為には寛容のようです。

WBC戦、12日夜の2次リーグの日本対オランダ戦は、終了したのが夜11時半過ぎでした。帰宅を厭わず球場で最後まで応援していたファンが大勢いました。「オール日本」というファンの意識は、公平で、純粋です。日本人の心を失った政治家が罷りとおっては、日本の先行きが思いやられます。

\*\*\*\*\*

東京の豊洲市場、大阪の森友学園と、東西の大都市が大揺れです。マスコミの関心が、石原元知事、籠池理事長と個人へ集中していますが、本質的なところへ切り込んでいかないと意味がありません。

\*\*\*\*\*

## 会員の広場

\*\*\*\*\*

「天のわざ」No. 21 を添付いたしますので、よろしくお願い致します。今回と次回は数学をかなり使いますが、高校の数学以上のものはなにも使っていません。今回は「微積分」の基礎について、はじめての方々にもわかってもらえるように、できるだけ平易に書くよう苦心しました。(伊那闊歩)

\*\*\*\*\*

### 卒業式の歌（２）「蛍の光」

現在の卒業式では、「蛍の光」「仰げば尊し」はほとんど歌わないようですが、オールド世代には、定番で懐かしい。443号で、明治の唱歌として「君が代」が最初にできたとご紹介いたしましたが、その次は「蛍の光」が、小学唱歌として世に出ました。歌詞は、以下のようです。

ほたるの光 窓の雪  
書よむ月日 重ねつつ  
いつしか年も、すぎの戸を  
明けてぞ けさは 別れゆく

とまるも行くも、限りとて  
かたみに思う、ちよろずの  
心のはしを 一言に  
さきくとばかり 歌うなり

筑紫のきわみ みちのおく  
海山とおく へだつとも  
その真心は、へだてなく  
ひとつに尽せ  
国のため

千島の奥も 沖縄も  
八洲のうちの 守りなり  
至らんくくに いさおしく  
つとめよ わがせ つつがなく

作詞者 未詳 原曲 スコットランド民謡  
「小学校唱歌集〈初〉明治14年11月」掲載

金田一春彦、安西愛子編「日本の唱歌」。には次のように紹介されています。

「小学唱歌集」には、「蛍」という題で発表された。この曲は、世界的に別れの曲として用いられ、もとはスコットランド民謡で、古語の英詩「久しき昔」(Auld Lang Syne)の旋律。その詩は、スコットランドの詩人ロバート・バーンズの作と言われ、彼は古いものをある老人から聞いて改訂したと言う。

讃美歌では「めざめよ我が霊」と謳われている。

スコットランドの民謡は、この曲に限らず5音音階のものがあり、これが日本の民謡の音階に似ているところから日本人に親しまれ、外国でこの曲のメロディーを聞いた日本人が、「おい、聞け、日本の歌がこんなところまで進出しているぞ」と言った話があったそう。

歌詞は難しく、「蛍の光」「窓の雪」と中国の故事をもってきたところがまず凝っており、「いつしか年も、すぎの戸を」のところは「過ぎ」と「杉」をかけており、子供には難しい。第二節の「かたみに」は「互いに」にの古語。「さきく」は、「元気で」の意味の万葉集時代の古語で古い。「心の端を、一言に」は「人毎に」という訛伝を生じた。

第三節の「筑紫のきわみ」は、「九州の果て」、「みちのおく」は、「奥羽の北端」、でまだしも、第四節の「千島」「沖縄」と、現代では通用しない歌詞です。戦前は最後の第4節まで歌ったのでしょうが、「蛍の光」は、単なる卒業式の別れの歌より、尽忠報国のこころを込めた別れの歌として誕生したと言えそうです。いつまでも第2節止まりとしていて欲しいものです。(津田)

\*\*\*\*\*

## 連 載 作 品

\*\*\*\*\*

### 天のわざ、地のほまれ —地球を測れ、宇宙をはかれ—

伊那 闊歩

#### 21. 役に立つ微分法と積分法—その1

現代社会において、ひとはエネルギーという言葉をしばしば使う。近頃は、再生可能エネルギーや原子核エネルギーなどについての話題がマスコミで盛んにとりあげられる。エネルギーとは「仕事をする能力」であるという。

では「仕事」とは何か「能力」とは何か。これらの言葉を厳密に定義するためには、じつは数学、それも「微分法」と「積分法」がどうしても必要になってくる。数学によって「力学エネルギー」を客観的に定義しておけば、それが（化石燃料から出る）熱エネルギーや電気エネルギー、（原発や太陽が持つ）原子核エネルギーなどすべてのエネルギーへの換算ができるので、エネルギーの全体像がより身近にうかびあがってくるのだ。

このシリーズでもエネルギーを最終テーマとしてとりあげたいと思っている。エネルギーとはそもそも何であるか理解し、エネルギー量を数値化して測ることは、われわれ現代人にとって最も重要な課題である。以下「エネルギーとは何か」を知るために、少々数学の準備をしておこう。

このシリーズ第12回において、ガリレオ・ガリレイがピサの斜塔（高さ約56メートル）で行ったという落体の実験（実際に行なわれたかどうか真偽のほどは明らかではない）に関連して、突然「微分法」を導入した。ここではまずこの微分法について復習し、さらにその逆演算「積分法」について必要な部分をまとめておこう。この世の中に「微積分法」ほど、強力に人の生活

に役に立つ数学はほかにはないと筆者は思っている。

落体は重いものも軽いものも空気抵抗を強く受けないならば、それらを同時に落とせば同時に着地すること、そして落下距離  $y$  はそれにかかった時間  $t$  の 2 乗に比例するということがガリレオは発見していた。これらのことを数式で現代風にいちどに表現すれば：

$$y = \frac{1}{2} g t^2$$

と書ける。つまり、この数式には落体の質量  $m$  が入っておらず、質量がどうあれ落下距離は同じであることを示している。そして距離を時間で微分すれば、任意の時間  $t$  における落体のスピード  $v$  が得られる：

$$\frac{dy}{dt} = v = gt$$

重いものが軽いものよりスピードが速くなることはない。スピード  $v$  をさらに時間で微分すれば、地球の中心方向への加速度  $\alpha$  が得られる：

$$\alpha = \frac{dv}{dt} = g \quad (= 9.8 \text{ m/s}^2)$$

ここで  $g$  は定数で地球表面近辺の「重力加速度」である。加速度はその（組み立て）単位が示すように、距離（メートル  $m$ ）を時間（秒  $s$ ）で 2 度微分したもので、これをライプニッツの記法に従って、次のように書く：

$$\frac{d}{dt} \left( \frac{dy}{dt} \right) = \frac{d^2 y}{dt^2} \quad \left( = \frac{dv}{dt} = \alpha = g \right)$$

次の公式は、微分法の最も重要な公式で、これからもしばしばつかう。

公式 1.  $y = t^n$  のとき  $\frac{dy}{dt} = n t^{n-1}$ , (  $n$  は実数 )

例えば

$y = x^3$  ならば (以後変数  $t$  のかわりに変数  $x$  を使うこともある)

$$\begin{aligned} \frac{dy}{dx} &= \lim_{h \rightarrow 0} \frac{(x+h)^3 - x^3}{h} = \lim_{h \rightarrow 0} \frac{3x^2h + 3xh^2 + h^3}{h} \\ &= \lim_{h \rightarrow 0} (3x^2 + 3xh + h^2) = 3x^2 \end{aligned}$$

となり、たしかに公式の  $n = 3$  の場合に相当している。ここで、記号  $\lim$  はすべて計算した後  $h \rightarrow 0$  にせよというコマンド記号である。特に、

$$y = C \text{ (定数) のときは } \frac{dy}{dx} = \lim_{h \rightarrow 0} \frac{C - C}{h} = 0.$$

また

$$y = \sqrt{x} = x^{\frac{1}{2}}$$

の時は、 $\sqrt{x+h} - \sqrt{x} = \frac{(\sqrt{x+h} - \sqrt{x})(\sqrt{x+h} + \sqrt{x})}{\sqrt{x+h} + \sqrt{x}} = \frac{h}{\sqrt{x+h} + \sqrt{x}}$  となるから

$$\frac{dy}{dx} = \lim_{h \rightarrow 0} \frac{\sqrt{x+h} - \sqrt{x}}{h} = \lim_{h \rightarrow 0} \frac{1}{\sqrt{x+h} + \sqrt{x}} = \frac{1}{2\sqrt{x}} = \frac{1}{2} x^{-\frac{1}{2}}$$

となって、公式 1 の  $n = 1/2$  の場合になっていることがわかる。n は分数でもマイナスの数でも公式は成り立つのである。

つぎに「積分法」について必要最小限のまとめをしておこう。

関数  $F(x)$  を  $x$  で微分したものが関数  $y = f(x)$  になるとき、つまり

$$\frac{dF(x)}{dx} = f(x) \quad (*)$$

なるとき、 $F(x)$  を  $f(x)$  の「原始関数」といい、積分記号を使って

$$F(x) = \int f(x) dx, \quad (**)$$

と書く。この式の右辺を、関数  $f(x)$  の「不定積分」という。積分は微分の逆の演算であるとするから、つまり、積分してそれを微分すれば元にもどるので

$$\frac{d}{dx} \int f(x) dx = f(x)$$

であるから (\*) と (\*\*) とは同じ内容を表していると考えるのである。

(\*) を積分すれば (\*\*) になり、(\*\*) を微分すれば (\*) になる。以上のことから、公式 1 に対応して次の公式 2 :

$$\text{公式 2. } y = f(t) = t^n \text{ のとき } \int t^n dt = \frac{1}{n+1} t^{n+1}, \quad (n \neq -1)$$

が成り立つことも明らかであろう。n = -1 の場合は特別で、この公式は使えないことに注意を要する。詳しくは次回に。例として

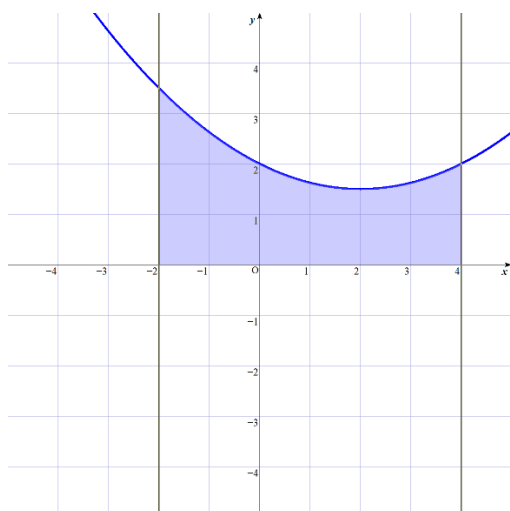
$$\int t^3 dt = \frac{1}{4} t^4, \quad \int t^{99} dt = \frac{1}{100} t^{100}, \dots$$

などが得られる。

以上、微分法の逆演算として積分を抽象的に定義したが、ここで、積分法によっていろいろな面積が計算できることを知れば、積分法がグッと身近なものになる。つまり、積分法は面積を計算するための有用な道具になるのだ。

次の図、fig.1 をご覧いただこう。

fig.1



( $x, y$ ) 平面に描かれた曲線（青線）は 2 次関数：  $y = \frac{1}{8}x^2 - \frac{1}{2}x + 2$  のグラフである。この曲線と  $x = -2, x = 4$  および  $x$  軸 ( $y = 0$ ) によって囲まれた領域（青色の部分）の面積  $S$  を計算してみよう。なぜこの青色の部分の面積が計算できるのか、その理由は少し説明が長くなるが次のとおりである。

この領域の右端は  $x = 4$  で固定されているが、固定しないで、面積  $S$  は  $x$  の関数として  $S(x)$  と書いて変数  $x$  をいろいろ動かしてみる。左端は  $x = -2$  に固定しておくのである。すると  $S(-2) = 0$  となる。なぜなら右端と左端が一致して面積はゼロになるからである。そこで  $\mathbf{x}$  を  $\mathbf{x}$  からほんの少し  $h$  だけ動かして面積  $S$  の変化を見てみよう：

$$S(x + h) - S(x)$$

は面積の増分であるが、これは図からわかるとおり殆ど  $f(x) \times h$  に等しい。つまり、高さが  $f(x)$ ，幅が  $h$  である。以上から幅  $h$  を無限にせまくとれば

$$\frac{S(x+h) - S(x)}{h} \rightarrow f(x), \quad (h \rightarrow 0)$$

となると考えて良いであろう。微分記号によって書き直せば

$$\frac{dS}{dx} = f(x) \quad (***)$$

であるから、面積  $S(x)$  は 上記 (\*) の  $F(x)$  と同じく  $f(x)$  の原始関数になっていることがわかる。では  $S(x)$  と  $F(x)$  は同じものであろうか。それを調べるために (\*\*\*) から (\*) を引いてみる。すると

$$\frac{dS}{dx} - \frac{dF}{dx} = \frac{d}{dx}(S - F) = 0$$

となって、微分したものが 0 になるならばそれは定数でしかなく

$$S(x) - F(x) = C = \text{定数}$$

つまり、原始関数は無数に存在するが、それらの差は常に定数なのである。

$S(-2) = 0$  であるから  $C = -F(-2)$  であることがわかる。以上まとめて

$$S(x) = F(x) - F(-2)$$

となる。これを積分記号によって

$$S(x) = F(x) - F(-2) = \int_{-2}^x f(t) dt$$

と書く。

積分の上端と下端を指定した積分を「定積分」といい、今の場合、関数  $f(t)$  を  $-2$  から  $x$  まで積分するという。

そこでいよいよ **fig.1** に示された青色の領域の面積を計算してみよう。

図から見られるとおり、 $-2 \leq x \leq 4$  の区間で積分するので、変数  $x$  の上端 4 と下端  $-2$  を積分記号に書き入れて

$$S(4) = \int_{-2}^4 f(t) dt = F(4) - F(-2)$$

を計算すれば良いわけだ。そこで次の不定積分：

$$\begin{aligned} \int f(x) dx &= \int \left( \frac{1}{8} x^2 - \frac{1}{2} x + 2 \right) dx \\ &= \frac{1}{8} \int x^2 - \frac{1}{2} \int x + 2 \int dx \end{aligned}$$

を公式 2 に従って実行すると

$$= \frac{1}{24} x^3 - \frac{1}{4} x^2 + 2x = F(x)$$

を得る。この式の  $x$  にそれぞれ 4,  $-2$  を代入して

$$F(4) - F(-2) = \frac{20}{3} + \frac{16}{3} = 12$$

以上、定積分法を使って **fig.1** の青色に塗った部分の面積が計算できて、それが 12 であることがわかった。初等幾何の方法だけでこの結果を出すこと

は不可能ではないが、大変手間がかかる。一方、積分法によれば、関数  $f(x)$  が与えられていれば、その原始関数  $F(x)$  をルーティンに従って計算するだけのことで目的を遂げることができる。原始関数が見つければそれに変数  $x$  の上端と下端の数値を代入して引き算すればよい。こうして、初等幾何学だけでは殆ど不可能であった面積や体積の計算が自由自在にできるようになったのだ。

積分法について最後に少し注意すべき事を述べておきたい。教科書によっては、公式 2 の原始関数に積分定数  $C$  をつけて定義しているものがある。

しかし、ここでは原始関数  $F(x)$  には積分定数をつけないで定義した。定積分の上端  $b$ 、下端  $a$  とし、関数  $f(x)$  の原始関数を  $F(x)$  とすれば

$$\int_a^b f(t)dt = F(b) - F(a)$$

であるが、これから

$$\int_a^a f(t)dt = F(a) - F(a) = 0,$$

$$\int_a^b f(t)dt = F(b) - F(a) = - \int_b^a f(t)dt$$

$$\int_a^c f(t)dt + \int_c^b f(t)dt = \int_a^b f(t)dt$$

などの式が成り立つことがわかる。

\*\*\*\*\*

＜そうだ京へ行こう・古刹の花物語＞（１８）

大竹 漢州

## 北山の古刹 １ ・岩倉・実相院門跡

実相院は、岩倉の荘にある由緒ある門跡寺院です。「岩倉」の名は、古代の『磐座（いわくら）信仰』（天から降臨した神が、巨大に安座する）から由来しています。

余談です。鞍馬寺のご尊天「護法魔王尊」が降臨した「磐座」と同じ言い伝えが残っています。共通する伝説です。旅人は、古代に巨大な隕石が、岩倉・鞍馬に降り注いだ天変地異があったのでは無いかと推測しています。岩倉と鞍馬は峠一つで隣接しています。隕石が落下して、暫くすると、この世は土埃と火災の煙で闇夜に一変し、雷が鳴り大雨が止まらずに降り続けました。恐怖で慄いた人々は、恐ろしかった暗闇の“クラ（鞍・倉）”を地名に忘れないために遺して、降ってきた大きな隕石を『磐座』として祀ったと想像しました。如何ですか？

現在、巨石は山住神社（石座神社）のご神体になっています。又平安京造営時に、京の四方の山上に一切経を納めて、東西南北四ヶ所の岩蔵が設けら



れた際、その一つが「石座神社」であったとも言われています。「岩倉」と呼ばれるようになったのは、鎌倉時代以降になります。

余談です。「岩倉」と言う地名で、思いだされる人物で明治維新に元老となった岩倉具視がおります。かつて500円札の肖像物の人物です。岩倉具視は徳川幕府を倒幕して、新しい明治維新を誕生させた元勲として、近代史に取り上げられています。岩倉具視の実態は、教科書に書かれているような傑物ではありません。西郷隆盛や勝海舟に比べれば、策士で毀誉褒貶な人物で、岩倉具視の周辺には幕末から明治維新に亘って幾つもの疑惑が付き纏っています。

一つは「孝明天皇の毒殺」に加担した疑惑です。孝明天皇は京都守護職であった会津藩主松平容保に対する信頼は殊の外に厚かったと言われ、天皇自らも日記に書き残しています。一方で尊攘派公家が長州勢力と結託して倒幕の陰謀を図る動きもあり、孝明天皇は長州藩に対して懐疑の念を抱き続けてました。孝明天皇の崩御は突然でした。孝明天皇の親徳川・親会津には、困る派閥がいました。公式な孝明天皇の死因は天然痘とされています。しかし逝去される病状が異常です。公家中山忠能の日記には「御九穴より御脱血」と書き遺しています。孝明天皇が目障りな人物は、側近で一人しかおりません。首魁の岩倉具視です。崩御後、幼い明治天皇を即位させると、反徳川家・会津藩に対しての処分は意のままです。これまで謹慎の処置をうけていた長州派の公家及び長州藩士たちは復帰して、戊辰戦争を経て、倒幕に勢いを増していったことは言うまでもありません。

一つは「倒幕の偽勅」です。本来は詔勅が出されるには、幾つもの手続きが必要です。天皇が原案を承認すれば、自らの手で日付に一字「日」を記入します。これを「御画日」と称します。詔勅の写が摂政・関白に届けられ、朝廷会議で審議され、妥当とすれば、再び天皇に上奏されます。天皇は詔勅に「可」の一字を記入して許可します。「御画可」と言います。江戸時代最末期の慶応3年10月4日(1867年11月9日)に倒幕の密勅が、薩摩藩と長州藩に秘密裏に出されています。即ち形式は詔書でしたが、倒幕の密勅は、明治天皇の「御画日」も「御画可」も欠いており、しかも摂政・九条斉敬の決済を受けていない「偽勅」でした。この偽勅の主導的な役割を果たし人物が岩倉具視であり、起草したのが側近の玉松操であったと言われています。薩摩藩の大久保利通も偽作に関わった人物であると思われています。密勅が出された11月13日の同日薩摩藩・長州藩の両藩に対して、京都守護職会津藩松平容保と桑名藩松平定敬の誅殺を命ずる詔書も出されていますが、形式上は「偽書」です。一つは「錦旗の偽作」です。

余談の余談です。「錦旗」は「錦の御旗」が正式で“にしきのみはた”と読みます。「錦旗」とは日と月を金銀で刺繍し、また描いた赤地の錦の旗です。歴史的には古く鎌倉時代頃から、朝敵討伐の際、官軍の標章として用いられてきました。即ち他に対しての自己の主張・行為を権威づけるためのものです。本来は天皇から下賜与えられものが「錦旗」ですが、これを偽作した人物も岩倉具視と大久保利通でした。鳥羽伏見の戦いが開戦される前夜、幕府連合軍の圧倒的な兵力と火器を前に、この難関を打開するために考えた奇策が「錦旗の偽作」でした。薩摩藩で打開策を鳩首した岩倉具視の提案で、一晚ありあわせの錦切を縫い合わせて、縫い上げた旗が「錦旗」でした。徳川

幕府軍も会津・桑名同盟藩も、大政奉還後に天皇に恭順の態度を取り、決して朝廷に刃向かう遺志はありませんでした。只々長州藩憎しの戦いでした。突然、敵の陣中から二旗の「錦旗」が立てられたことで、本来戦う意思のなかった徳川慶喜始め幕軍・列藩軍は支離滅裂になり、戦えば間違いなく勝利した機会を「偽錦旗」で失うことになりました。岩倉具視と大久保利通は奸物でした。ある歴史家が、“もし”は歴史にはないが、“もし幕府軍が勝利していたら”、その後の日本国は軍国主義的な国家ではなく、デンマークや皇室を敬う北欧三国の様な中立国になっていただろうと書いています。

本題に戻ります。実相院門跡を訪れることにします。実相院の創建は鎌倉時代まで遡ります。1229年（寛喜元年）に静基上人によって開基されています。初めは紫野の地にありましたが、この寺院も応仁の乱を避けて岩倉に避難しています。しかし室町時代末期までに、大半の伽藍は焼失してしまい、江戸時代初期を皇室と徳川家光の援助を受けて再建が叶った寺院です。

余談です。かつて京都に存在していた古刹の大半は、「応仁の乱」と以後の度重なる大火で消滅しています。江戸期を迎えて以降、大寺院は徳川将軍と夫人の援助で再興されています。しかし幕末の「鳥羽伏見の戦い」で再び火災に見舞われて焼失した寺院も少なくありません。

実相院に最初に入寺した人物が足利義昭の孫義尋であり、母が皇室に入内していた事もあり、皇室の支援を受けて、以後皇族や摂関家出の人物が貫首を務めた事から門跡寺院となりました。

本堂は東山天皇の中宮であった「承秋門院」の大宮御所を移築し、正面の門（四脚門）・玄関横（車寄）・中の建物（客殿）も京都御所から移築された建物です。当時、御所が新築されたり改築されたりすると、旧御所は廃材にされるのではなく、皇族や公家に払い下げられ移築する事が習慣的に行われていたようです。京都御所の遺構が、今日も寺院や問跡寺院で目にできる訳です。

余談です。岩倉具視もこの門跡寺院に、一時隠れ住んで反幕藩派と密談をした記録が残っています。大久保利通も訪れていたに違いありません。

実相院門跡は二つの庭があります。一つは比叡山を借景にした枯山水庭園で、季節ごとに趣を変える庭園の美しさは、一度目にしたら忘れられない景色です。春には八重桜を背景にして、秋には赤く染まった紅葉に彩られた緑の比叡山が望めます。一つの山水庭園は、奥の書院と客殿の間にあります。裏山の景色が庭の木々や池水の背景となり、雄大な「枯山水庭園」とはひと味違った趣を感じます。特に秋は青空を背景にして紅葉が赤くなって池に映る姿は一入です。

実相院門跡にはもう一つ“見所の景色”があります。滝の間の秋の「板もみじ」初夏の「板みどり」です。前日（2015年11月26日）、NHK朝のニュースで紹介されたので、滝の間は黒塗りの廊下に映りこんだ「板もみじ」を一目見ようと押しかけた人々で、立錫の余地もありません。今年の源光庵の「悟りの窓」と同じ状況でした。しかも無粋に、天井のスピーカーから絶えまなく「写真撮影は止めて下さい」とかなり立てられ、折角の景色が台無しです。高い入山料を払っているのに、写真の一枚くらい撮らせてあげても良いもの

に！最近の京都の寺は高慢な態度で“見せてやる”の姿勢が強すぎる。永観堂然り、大徳寺の大仙員然り、妙心寺の退蔵院然り、養源院も然りでした。

足早に滝の間を後にして、特別展示をしていた実相寺のご本尊の不動明王の参拝に、次の間に向かいました。スピーカーで叫ぶ声がしつこく追いかけてきました。スピーカーで叫ぶ王は、火炎に包まれ怒り顔で、幽玄と静寂を壊す無粋な僧侶の騒々しい声を睨んでいるようです。地獄に落ちる者は、仏の心『慈悲（思いやりといたわり）』の欠片も無く『喜捨（拝観料）』しか頭がない金の亡者と化した観光寺の関係者です。

帰りに立ち寄りませんでした。実相院門跡から歩ける距離に「岩倉具視幽棲旧宅」が残されています。岩倉具視は幕末の騒乱沈静化の一策として、所謂「公武合体」を進め、皇女和宮の將軍家降嫁を計画しましたが、倒幕急進派に反対を受けて、官職を辞した岩倉具視は、この旧宅で1862年（文久二年）から1867年（慶応三年）まで幽棲しています。この5年間で岩倉具視は倒幕の策士に変心して、大久保利通と図って、朝廷を朝廷とも考えずに、倒幕の首魁に変心した人物です。混雑していた実相院門跡に飽き飽きして外に出ました。

\*\*\*\*\*

## 般若心経読本（5）

藤田 克明

〔仏設摩訶（ぶっせつまか）〕

般若波羅蜜多心経（はんにゃはらみったしんぎょう） 唐三蔵法師玄奘 訳

是故空中無色 無受想行識 無眼耳鼻舌身意

（ぜこくうちゅうむしき）（むじゅそうぎょうしき）（むげんにびぜつしんい）

無色声香味触法 無眼界 乃至無意識界

（むしきしょうこうみそくほう）（むげんかい）（ないしむいしきかい）

（それゆえに空の中には色も無く、受・想・行・識も無く、眼・耳・鼻・舌・身・意も無く、色・声・香・味・触・法も無く、眼界も無く、乃至意識界も無し。）

【訳】 仏の「空」という世界では、五蘊（ごうん）（色受想行識）はもとより、六根（ろっこん）（物事を認識する機能。認識・感覚器官）もなく、六境（認識される対象物）もなく、したがって六識もない。

### 【解説】

一、

ここでも、ないない尽しで「色即是空」のことを繰り返しいっています。『般若心経』の「ない」は、大きな仏の働きからみると、実は一つ一つの働きにこだわってはいけないう「ない」であって、何も無い、かにも無い、の「ない」ではありません。「空」という世界で生かされるためには、こだわってはいけませんという、その「ない」です。空という広い世界の中では、人間の

眼もなくなってしまう。これは眼が見えなくなるということではなく、眼の働きがなくなっても、自由に仏を見ることができるという積極的な意味と、私たちの眼の働きだけでは真実はみえないぞ、という消極的な意味の二つの面から、いわゆる肉眼にこだわるなということです。心眼を強調しているのであって眼以外の他の機能についても同様であるといっています。このように感覚器官にとらわれてはいけないといっていますが、これは感覚を否定するのではなく、感覚だけでは仏の世界の外側をなでることはできても、中にはいることはできない、真実の外側をなぞるだけだということを行っているのです。

言い換えれば、心の働きという「縁」が加わらなければ、この世のすべてはないのと同じであるということだと思います。

## 二、

字句に沿って見ていきましょう。釈迦のいう人間の五つの構成要素である五蘊（色、受、想、行、識）はないと言い、私たちに生まれたときから身体に備わっている六種の認識器官（六根＝眼、耳、鼻、舌、身、意）もないと言い、六根の対象となる六種の頭で考える認識領域、つまり見られる側の六境（色、声、香、味、触、法）もないといっています。五蘊の否定は二度目です。

釈迦仏教では

- ① 人間の持つ六つの器官・能力（六根）を働かせることによって、
- ② 外界の対象物（六境）を感知するとしていますが、その①がないので
- ② もないといっているのです。したがって六識もない（「無眼界 乃至無意識界」）言っています。

界は、世界とか境地という意味で「乃至」は中間、間を省略しているということです。なお「無眼界」は、「無眼識界」と記すべきではないでしょうか？ 釈迦仏教では六つの認識界を六識といい、それは眼識、耳識、鼻識、舌識、身識、意識の六つでした。この「五蘊」からはじまる釈迦の世界観は、五蘊から始まって「六根」「六境」即ち「十二処」、そして更に「十二処」を使った結果、人間がものを正しく認識する「十八界」が存在するのだと考えています。このような考え方、論理の組み立て方―「五蘊・十二処・十八界」―はものの見方としての仏説になっており、かなり論理的です。

しかし大乘仏教である『般若心経』は、感覚だけではダメだ、仏の「空」の世界に入ってもものの真実をみなければ真実の周りを巡っているにすぎないと説いています。いくら智慧をしばって世を分析しても見えてくるのは架空の現ればかりであって、この世の真の姿は、その奥にかくれたままである。真の姿は、もう言葉では言い表すことが出来ない理屈を超えた神秘の世界なので「空」としかいえないとしているのです。

大乘仏教で「この世は空である（全宇宙が絶対的に空）」というとき、そこにはこういった神秘に近い不可知な世界が想定されています。この世界は人知では捉えがたい神秘的な形―超越的な法則―で存在していると考えているわけです。

補足しますと釈迦の思考、世界観は論理的、科学的であるがゆえに、情や思いやり、なさけがあまり感じられない。一方大乘仏教の考え方は「あり得ないかもしれないが、何とかこうしてほしい」とか「無理かもしれないが、こ

うならないかな」といった期待や夢、希望がもてる余地を作ったところに、その価値を強調したのではないかと思います。知性や自己鍛錬を重んじる釈迦仏教に対し、情緒や感情で納得することもあるのだという世界観、人生観が大衆（衆生）には支持されると大乘仏教グループの人たちは考えたのでしよう。この大乘仏教の世界観、人生観の何たるかについては以下に更に大胆に出てきます。

### 三、

この段で「承」、つまり『般若心経』の「空」の思想の展開は終わりますので、ここで大乘仏教の概略を整理しておきましょう。大乘仏教は、西暦紀元前後インドに興った仏教の新たな理念形成、変革の運動です。釈迦滅後100年ほど後に、釈迦の教えた仏教が様々に分派して派閥が出来ましたが、一方でそれを統一して釈迦の教えの原点に帰れという運動がインドの南の方に興りました。その混乱のなかで、系統立てて纏められた仏教が大乘仏教です。

大乘仏教が興る以前は、『阿含教』（「アーガマ・a-gama」）に所収した限られた経典のみが仏説であると認められていましたが、大乘仏教は新たに生み出される経典をも仏説と認めた点にその特徴があります。その立役者は龍樹（ナーガールジュナ）で、多数の大乘経典を著し「空」という哲学を理論化した大乘仏教最大の思想家です。大乘仏教者たちは、菩薩の立場に立って生死輪廻をいとわず涅槃を願わず、つまり生死にも涅槃にも執着しないという「空」の立場を徹底して説いています。

また、その実践にあたっても釈迦仏教の阿羅漢のように、理論や学問を専業とし出家するというような形式主義はとらず、菩薩は信仰実践を重んじ、在家中心でよいとするなど民衆に受け入れやすいシステムになっています。それゆえか大乘仏教は、たちまちインド全域に普及したといわれます。その修行道は六波羅蜜多に集約されていますが、釈迦仏教の説く修行道（八正道・はっしょうどう）と比較することによっても釈迦仏教と大乘仏教との差異が分かります。六波羅蜜多とは「布施・持戒・忍辱・精進・禪定・智慧」をいいます。注14のように智慧は八正道の正見・正思惟にあたり、持戒は同じく正語・正業・正命にあたり、精進は正精進にあたり、禪定は正念・正定にあたります。残りの布施と忍辱が八正道にはありません。

これは何を意味しているのでしょうか。八正道は元来、自己の智慧や人格を磨き、自己を完成させるための修行道です。そこには直接他人を導いたり救ったりするような対社会的な面はなく、主として自分ひとりの完成を説いています。しかるに六波羅蜜多の布施（出家修行者、仏教教団、貧窮者などに財物を施し与えること）や忍辱（耐え忍ぶこと）は対社会的なものであって、相手がいなければできない修行道です。大乘仏教が大衆を相手にした大きな乗り物といっているのは、この意味からです。

布施が六波羅蜜多の最初におかれているのも大乘の特徴を主張したのだと思います。ただここで注意したい点があります。それは「arhan」（阿羅漢）というサンスクリット語は、応供（おうぐ）と訳されているように元々は信者大衆から衣食の供養を受ける資格のある人の意味であり、民衆に対して利益を与えていたのです。釈迦が活動した初期に六〇人の弟子が阿羅漢になると、直ちに諸地方に向けて教化伝道に出されたという言い伝えが残っています。したがって大乘仏教が四諦八正道や阿羅漢を非難し、排除することは当

を得ていないと思います。しかし釈迦仏教の徒が、仏教の理想を実践することを怠るようになり、それが非難されたと見れば不当ではないかも知れません。

このように、大乘仏教と釈迦仏教の間では時の経過により両派の置かれた環境が変化していますので一概に決めつけられない面があります。

『般若心経』は、六〇〇巻もあるといわれる『般若経』のエッセンスですが、その内容は釈迦仏教の重要教理を否定しつつも、釈迦の教えに添いながら人々が自分のできる範囲で思索を深めていくという柔軟な姿勢も読みとれます。誤解を恐れずにいえば、大乘仏教では釈迦の説いた説法の解釈を、ただ一つの正解とするのではなく、僧侶や信者の数だけの考え方（宗派）があるとしているともいえます。それが「こだわってはいけな い」ということです。なお、「阿含教」は、釈迦から直接伝承された説教またはその集成聖典で、明快、合理的内容をもった初期仏教の経典をいいます。

〔注 14〕

八正道（上段）と六波羅蜜多（下段）の関係

正見（正しいものの見方）、正思惟（正しい考え方をもつ）

= 智慧

正語（正しい言葉を語る）、正業・しょうごう（正しい行いをする）

正命・みょう（正しい生活を送る）

= 持戒

正精進・しょうしょうじん（正しい努力をする）

= 精進 しょうじん

正念（正しい自覚をもつ）、正定（正しい瞑想をする）

= 禪定

\*\*\*\*\*

## 文化講座・講演会

\*\*\*\*\*

奈良興福寺文化講座 2017年年4月20日（木曜日）

午後5時半～6時半：第一講

講演：「般若心経入門（最終回）」

興福寺 副貫首 森谷英俊

午後6時40分～7時・・・心を静める

午後7時～8時：第二講

連続講話・「奈良・祈り・心」

興福寺 貫首 多川俊映

会場：（学）文化学園 文化服装学院内

受講料：500円 先着200名

（JR新宿駅南口、小田急線、京王線各新宿駅から8分、都営新宿線新宿駅3分）

\*\*\*\*\*

第81回 新三木会講演会のご案内

日時・会場 2017年4月20日(木)13:00-15:00

1. 演題・講師 『今後の日露関係について』

コンサタンチン・サルキソフ氏

山梨学院大学名誉教授、法政大学講師

ロシア科学アカデミー東洋学研究所顧問

2. 申込・会費

E/Mail: [shinsanmokukai@gmail.com](mailto:shinsanmokukai@gmail.com)

TEL: 047-464-4063

フルネーム・卒年・所属 (例:一般・紹介者名)

会費:2000円 婦人 1000円 学生無料

茶話会:15:15-14:20 千円 (自由参加)

3. ホームページ

<http://jfn.josuikai.net/circle/shinsanmokukai/>

なお、ご希望の方には、講演の録音記録・講演抄録・参考資料をメール頒布いたします。(千円)

4. 予告

● 5/18, 第82回 『ブラジルは跳飛できるかーその現状と将来』

堀坂浩太郎氏

上智大学名誉教授

栗田政彦氏

日伯経済文化協会副理事長

新三木会代表幹事 則松久夫

(Email) [shinsanmokukai@gmail.com](mailto:shinsanmokukai@gmail.com)

(Tel.) 047-464-4063 090-3813-0137

\*\*\*\*\*

事務局

\*\*\*\*\*

<事務所までの道のり>

場所: 〒110-0016 台東区台東2-21-9 双葉ビル2F202号  
(電話・FAX 番号: 03-3837-0290)

御徒町界隈では、JR山手線・京浜東北線と昭和通りが南北に並行して走っています。

- ① JR御徒町駅北口を出てすぐ右に折れて、2ブロック直進すると、昭和通りに出ます。右に多慶屋の紫色のビルを見てさらに8ブロックほど直進すると、
- ② 都営大江戸線の新御徒町駅のA2入口が右側にあります。やや進むと(都営大江戸線の新御徒町駅A2入口を出た場合は右に回ると)、佐竹商店街のアーケードがあります。右折してアーケードを7ブロックほど直進すると、佐竹商店街の出口に到達します。そこを右に曲がってしばらく行くと、左側に薄青いビルがあります。(1階は焼肉屋「もとやま」。)そのビルの2階です。

<投稿歓迎><図書のおすすめ依頼>

<プリント版・郵送>

メール版(無料)を月に一回編集してプリント版を発行郵送しています。お申込みくだされば送りします。その際には、実費として1月350円(4200円/年)をいただいておりますのでご了承ください。

<振込先> 三井住友銀行「神田支店」 (普通) 7871532  
(口座名) テンチシニアネットワーク

<配信・郵送、不要の場合はご一報ください、中止いたします。>

---

**天地シニアネットワーク・テーブル・444号**

**発行：2017年3月15日**

**：天地シニアネットワーク事務局 (津田 孚人)**

〒110-0016 台東区台東2-21-9 双葉ビル2F202号室  
TEL・FAX 03-3837-0290  
E-Mail tenti@mvc.biglobe.ne.jp